

No.56

2007年11月23日

昔のエピソードなど聞きながら 晩秋の植物園を歩いてみませんか

案内 田端英雄

1. 植物園の設立

1923年に理学部植物学教室の植物生理生態学講座の郡場寛教授が植物園を設立。思い入れは相当なものだったと思われる。分類学教室があつたにも関わらず、生理生態学教室の教官を「植物園助手」としていた。この植物園は未だに官制外である。畑の中に人工的に池や山や平地や砂丘やロックガーデンなどをつくるわけだから、郡場さんが目指したのは、まずは生態植物園だったとっていいと思う。ここでいう生態学は、生理生態学あるいは個生態学 autoecology で、群集生態学 synecology の視点ははなかつた。

生態植物園としては、異なった環境条件を備えた植物園を目指したようである。琵琶湖疎水から導水された二つの池と沼（湖沼環境と水生植物、ヨシ原）、丘、ロックガーデン（岩礫地植物、高山植物？）、砂丘（砂丘植物の生育）、洞窟（ヒカリゴケの生育など）、溪畔環境などを備えた。

ここで、郡場さんが指導したイネを中心にした植物の植物微気象に関する研究がおこなわれた。その時使われた実験水田が今も残っている。この研究が、植物学教室における浸透圧や耐寒性・耐乾性などに関する研究にうけつがれる。

通常の植物園（植物の収集を目指す植物園）としては、分類群ごとに区画を分けて植栽された。針葉樹の区画、バラ科を中心にした区画、マメ科の区画、尾状花群の区画（ここにナラ類の落葉広葉樹林と常緑広葉樹林がつけられた）、モクレン科、ウルシ科などの区画、竹類、溪初期の植物園建設には、後にメタセコイアの命名者として高名な三木 茂（大阪市立大学名誉教授）が貢献した。

面積をけずられる受難の歴史⇔自然史に対する無理解（基礎物理学研究所、数理解析研究所

面積が狭いので収集目的の植物園としては限界がある⇔分類群毎の区画は乱れてきた

植物園の管理 年2回の草刈り、落葉落枝を使った腐葉土づくりが管理上重要（甲虫の生息、林床管理）

近隣住民との関係—緑の価値（竹の落葉、樹木の落葉と糞など）

<この植物園の存在意味>

1200種類もの植物が生育して森を構成している⇔生の生物材料を研究や実習に提供し続けている

ここにしかないものも多い（植物学、動物学、農学、薬学、工学など）

とくに、琉球産や中国産の植物はすごく貴重な機能（系統保存）

現生のメタセコイアが最初に贈られたのもこの植物園

水槽の中の植物が実習材料・実験材料として貴重⇔水槽の話、マコモとムジナモの話

琵琶湖水系の魚

90年も経つと、植物だけでなく、動物相（昆虫、土壌動物など）も豊かになり、身近な自然として、群集生態学的な観点から見た植物園の意義が大きくなった（京大博物館に組み込むべきであった）

多くの動物生態学、昆虫生態学（とくに個体群生態学）の研究や実習のフィールドとして使われ続けている（植物と動物の関係、動物と動物の関係（森下正明のアメンボの研究など））。測量実習まで行われる。

環境の多様性と生物の多様性を観察できるすばらしい場所

植物はいうに及ばず、ヨシ原のカヤネズミ、コウモリなど

世界の文化につながる機能—中国の漬物 *Cedrela sinensis*、ネパールの lapsi (*Choerospondias axillris*)

2. この植物園の意外な意義—2万平米の多様な自然

・吉田山とつながった自然：フクロウの生活圏

かつてはニホンヒキガエルは吉田山と植物園を往き来していた

・アカショウビンの目から見た植物園

・身近な緑、散策の場所

・コウモリ

・飛ぶことができる動物と違って、多くの植物はどこから来たのか⇔意義を考える時の視点

(Nov. 23, 2007)